

令和元年6月14日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K21439

研究課題名（和文）宋～清代中国の地方志編纂の展開 編纂過程と治績記載を手がかりに

研究課題名（英文）The Development of Editing the Local Gazetteer from the Song to the Qing Era: An Examination of the Editing Process and Description of Local Governance

研究代表者

小二田 章 (KONITA, Akira)

早稲田大学・文学大学院・その他（招聘研究員）

研究者番号：10706659

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：中国の宋代以降の「地方志」の編纂活動と社会変容について、杭州を場として、地方志編纂とその背景の検討を行った。まず、南宋期に編まれた地方志について編纂形式確立の政治的背景を明らかにした。また、元朝における地方志全国化の端緒となった『大元一統志』の編纂過程に関する試論を行った。次に、明代の『萬曆杭州府志』について、地方志の記載を作りだす撰者・陳善の意図と背景の時代的特徴を考察した。さらに、清初期の『西湖志』を対象に清朝の文化支配について考察した。そして、乾隆期の地方志編纂の思想的リーダーである章学誠について、研究整理と「烈女」項目に関する報告を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

宋～清代の地方志の編纂背景を歴史的に位置づけることで、地方志の形式・記載の変化発展の過程を明らかにし、その過程の背景と時代性の存在を示すことが出来た。これにより、史学史上の問題のみならず、地方志編纂を通じて各時代の社会を検討する新たな研究上の視座を獲得した。また、地方志の記載の一種類である治績について、その記載の変遷過程について明らかにした。以上の中国の「地方志」に関する研究成果を挙げたことで、地方志を媒介にしたジェンダー史研究、及び東アジア全域で制作された同様の書物カテゴリ「地方史誌」の時代性と世界史的意義など、新たな学問領域に進むための基礎を確立した。

研究成果の概要（英文）：With regard to editing local gazetteers and their influence on changing societies after the Song era, I examined the editing of local gazetteers and their contexts in Hangzhou. First, I resolved the political background of the form of editing established for local gazetteers. Second, I considered the preliminary editing process of Dayuan Yitongzhi, the leading national local gazetteer. Third, with regard to Wanli Hangzhou fuzhi in the Ming era, I analyzed the thought of editor Chen Shan and his background. I also considered the cultural policy of the Qing Dynasty, using Xihuzhi in the Early Qing era. Finally, concerning Zhang Xuecheng, the ideal leader who edited local gazetteers in the Qianlong era, I reported on institutional arrangements and studied the category of "faithful women" in local gazetteers.

研究分野：中国近世史

キーワード：アジア史 中国 地方志 編纂過程 記載形成 治績 近世 杭州

## 1. 研究開始当初の背景

「地方志」とは、中国王朝期に地方官主導で編まれたある地域の総合的記録であり、特に南宋期以降、沿革・経済・行政・文芸などを一定の形式により描いたものを指す。この「地方志」は、現在も編まれ続けており(新編地方志)中国の伝統的文化・意識を体現する史料である。

「地方志」についての先行研究としては、日本では、青山定雄「隋唐より宋代に至る総誌及び地方誌について」(同『唐宋時代の交通と地誌地図の研究』、吉川弘文館、1941)の先駆的かつ網羅的な研究が存在する。しかし、この研究はあくまで社会経済史の史料として「地方志」を位置付けており、「地方志」自体を研究の対象とみなしてはいない。一方、中国では「方志学」という学問分野が存在し、多くの言及が行われてきた。しかし、「方志学」の研究では、文献としての特徴に重きが置かれ、成立背景の歴史学的検討はあまり行われていない。

欧米における地域史研究の進展は、例えば Peter K.Bol, "Neo-Confucianism and Local Society, Twelfth to Sixteenth Century: A Case Study", Paul J. Smith ed. *The Song-Yuan-Ming Transition in Chinese History*, Cambridge, MA: Harvard University Asia Center, 2003 が「地方志」は地域の歴史意識の表れとするなど、新たな研究視座をもたらした。また、地域史研究の影響のもと、須江隆「『呉郡圖經續記』の編纂と史料性 宋代の地方志に関する一考察」(『東方学』116 輯、2008)などの「地方志」の編纂過程に踏み込んだ研究が始められた。これらの地域史研究のなかの地方志研究は、あくまで地域理解のためであって、地方志自体を専門的に深く掘り下げた研究はわずかである。

報告者は修士学位論文にて中国宋代の地方官がどのように善政のイメージを残そうとしたかを検討し、以後一貫して、宋代の「治績」(地方官の善政の記録)の描かれ方を通じた中国伝統社会の理解を試みてきた。その一方、2008-2010年にかけて中国・浙江大学(杭州)に留学し、現地の研究手法を学習し、また研究者との交流・史料調査などを経験して、地域と深く結びついた「地方志」という史料に着目した。その過程で、宋代の社会的要因で出来上がった「地方志」が、後の時代に中国全域に広がった原因とは何か、という問題意識が生まれた。これらの成果を併せ、宋代の「地方志」と「治績」の展開を考察した博士学位論文「宋代における治績と地方統治 地域意識の形成を中心に」(早稲田大学大学院文学研究科、2014)を制作した。

以上の状況のもと、本研究課題を開始した。

## 2. 研究の目的

本研究は宋代における「地方志」の編纂と、記述の背景理解を深め、さらに宋代以降、元~清代の「地方志」(該時期の中国全土に共有される文献)において、編纂とそれに連なる社会の変化を検討する。そして、その成果を通じ、後期王朝期を通じた、地方官と地域社会の接点に発生する社会秩序(ある地域の安定状態を維持する意識の構造)の変遷史を描き出すことを目標とする。当面の課題としては、各時代ごとに「地方志」の編纂過程・史料的性質を理解し、史料と社会との結び付きを明らかにする。報告者は宋代以降地方志を数多く編纂した杭州地域を場とし、各王朝期ごとに特徴的な史料を検討する。後期王朝期の杭州における地方志編纂過程を概観し、最終目標である「伝統王朝期における地方志編纂の意義づけ」の議論の端緒をつくるのが可能になる。

「研究の背景」にて述べたように、「地方志」をその編纂意義から検討した研究は少ない。今回の研究により「地方志」自体の歴史的位置づけを明らかにすると同時に、後期王朝期を「地方志」編纂というユニークな視座から見直し、伝統社会の秩序の働き方を見通すことが可能になる。また、それぞれのサンプルは、各時代における史料制作の過程、歴史認識などに大きく関わるものである。例えば、宋代の研究により、政治的要因などにより極めてバイアスがかかっているとされる同時代史料の記載のありかたについて、理解する端緒を築くことができる。元~明代の研究については、近年元から明への移行において大きな問題となっている「明初期の史料記載の消失」について、その原因理解の一端となるものである。

そして、地方統治システムに伴い成立するこの「地方志」という書物が、近世東アジアにおいて、朝鮮の邑誌、日本の藩史といった類似の書物を生みだしていることに対し、これまで明確な議論が存在していなかった。本研究は、中国の「地方志」の検討を通じて、これら同様の書物を生みだす社会背景を検討する比較研究の基盤を造るものである。

### 3. 研究の方法

「地方志」について、その編纂過程、及び編纂主体である地方官と密接に結びついた「治績」項目について主に検討を行う。具体的には、それぞれの項目を、書誌学的状態も含めて丹念に検討することで、「地方志」の歴史的位置づけを明らかにするものである。

使用する史料である「地方志」は、特定の地域に関する政治・経済・人物・文芸などをまとめた書物である。この「地方志」について、その編纂過程、及び編纂主体である地方官と密接に結びついた「治績」項目について主に検討を行う。既に述べたように、これらについての検討は少なく、また検討によって得られる成果である「地方志の歴史的位置づけ」は、現在注目される「後期王朝期中国の史料的変遷」に新たな視座をもたらさう。

実際の研究遂行においては、近年充実した電子資料を駆使するほか、日本(静嘉堂文庫など)・中国(国家図書館、天一閣など)・台湾(中央研究院など)・欧米(ハーバード燕京研究所など)の図書館など地方志を収蔵している研究機関に赴き、実物を調査し、書誌学的な考察を併せて行う。これは、世界各地に地方志が収蔵されていることに加え、その書誌学的状態の理解が、編纂過程・流伝過程の重要な鍵となるためである。また、中国の訪問に際して、検討対象の地域理解を深める目的のフィールド調査(石碑・古跡の実見など)も併せて行う。

さらに、報告者は中国宋代史を研究対象としてきたが、本研究の過程では明清史夏合宿、AASなど異った時代・ディシプリンの国内外の学会に積極的に参加し報告を行う。これは、本研究の成果を俎上に置き、その時代を超えた有効性を確認しより高い到達点を目指すものである。また、宋代史と以後の時代の研究接続が不十分である実情を踏まえ、議論を通じた研究接続を図る。

### 4. 研究成果

本研究課題の成果は、いくつかのテーマに分かれる。以下、テーマごとにまとめる。

#### (1) 宋代地方志の編纂と「地方志」成立背景

まず、南宋期杭州の3つの『臨安志』の編纂過程とその意義づけについて、内『乾道臨安志』と『淳祐臨安志』を例に検討を行い、併せて宋代の「地方志」編纂開始の状況について先行研究を踏まえた考察を行った(後掲論文5、発表1・4)。結果、3つの『臨安志』は全て地方志としての位置づけが異なり、それぞれの時期毎の政治的要請に基づいた形式・記載で書かれていることが明らかになった。また、『咸淳臨安志』については、これまで検討が行われていなかったその撰者・潜説友について、伝記的な記載を網羅して検討を行った(論文2・4、発表2)。結果、『咸淳臨安志』の成立背景である南宋末期の政治的背景と潜説友個人の記載を作る志向性を明らかにした。さらに、宋代杭州の代表的な名地方官である蘇軾について、その治績がいつ杭州にて認知されたかについて、研究整理を兼ねた報告を行った(発表8)。そして、南宋期に制作された地方志及び隣接史料である「類書」について、史料紹介及び研究論文の翻訳を行い、研究進展・時代性理解の助けとした(論文7・9)。加えて、「宋代」から後の時代に及ぶ歴史を照射することを目的にした論文集のテーマ設定と編集に携わった(図書1)。

#### (2) 元～明初期地方志編纂の全国浸透背景と史料的問題

元～明初期において地方志が全国に浸透したのは、『大元一統志』『大明一統志』のふたつの王朝による総志編纂とその際の地方に対する「材料としての地方志」編纂命令が大きな要因である。そのため、報告者は研究会「『大元一統志』『大明一統志』比較研究会」(略称:大元大明研究会)を組織し、参加した研究者と議論を行って該時期の編纂・記載内容及び史料的問題に関する理解を深めたほか、その議論をもとに、『大元一統志』の「沿革」項目を用いて記載の形成過程を明らかにする史料研究の試みを行った(論文3、発表3)。

#### (3) 明代地方志編纂の定着と記載内容の変化背景

各地で地方志編纂が定着し、現在にまで残る書籍としての地方志が地方一般に編まれるようになるのは、明後期の嘉靖年間(1522-66)前後からである。この明代の地方志について、中国語以外での初めての専著である Joseph R. Dennis, *Writing, Publishing, and Reading Local Gazetteers in Imperial China, 1100-1700* について、書評を行い、研究整理と自身の研究進展の基礎とした(論文8)。また、明代地方志の中で最大の巻数を持つ、杭州の地方志『萬曆杭州府志』について、その撰者・陳善の伝記的背景と、治績を手がかりにした「宋代」「明代」に対する陳善の理解を考察し、『萬曆杭州府志』自体の特徴と時代性について併せて検討を行った(論文1、発表7)。陳善は、地方官の経験からより真摯な議論・参考として地方志の記載を作っており、同時代の問題をふんだんに盛り込んだ内容は、他の地方志と比べても突出したものとなっていた。明末の社会問題に対する真摯な感覚が、その内容に表れていると考えられる。

#### (4) 清初期、清朝による地方志編纂の促進とその理由

計画段階では対象に含まれなかったテーマだが、清初期に極めて多数の地方志が編まれていること、また清朝の漢族に対する文化統治の側面があることなどから、特に注目して検討を行った。清朝初期の杭州の地方志編纂の背景を考え、併せて同時期に杭州の地方政府が編んだ杭州の名勝・西湖を扱った『西湖志』を中心に、清朝の漢族に対する文化統治、及び漢地を中心にした水利統治について検討を行った(論文6、発表5・9)。特に、「名勝志」を官が編むという状況が、漢族の文化的象徴を清朝が自分のものとして上書きする行為であるということを示した。

#### (5) 乾隆嘉慶期、伝統王朝期地方志編纂の到達点と社会背景

計画段階では、乾隆・嘉慶期に編まれた地方志(杭州の『乾隆杭州府志』)が、伝統王朝期の地方志の総括として編まれたとする仮説のもと、同時代の地方志編纂と背景を検討する予定だったが、前述(4)が新たに加わったこともあり、この時期の検討は達成できなかった。そのため、検討に着手する準備を兼ねて、当時の地方志編纂の理念的リーダーであった章学誠について、その地方志における女性記載を検討すると併せ、その地方志編纂理念の研究整理と、実際に編んだ地方志の内容整理を行った(発表6)。また、同時代の「個人編全国志」に注目し、史料調査と研究整理を行った。

#### (6) その他(発展的問題など)

地方志に附される「地図」に着目し、杭州(西湖)の歴代地方志・名勝志の概念図から近現代の観光案内に附される測量された地図まで取り上げ、その概念の変遷やそれぞれの地図の意義づけについて検討を行った(発表10)。また、近代杭州の観光と土産物である絵はがきをテーマにした小文にて、近現代の観光に及ぶ地方志からの伝統的視座を取り上げて述べた(論文11)。

その他、明末清初期の鄭成功と清末期の沈葆楨という二人の歴史人物と評価をめぐる論文を翻訳し、治績と結び付く歴史的評価とその場である地方(この論文では台湾)の結び付きを考える機会とした(論文10)。

5. 主な発表論文等

{ 雑誌論文 }(計 11 件)

1. 小二田章『万曆杭州府志』初探 明代後期の地方志編纂者の見た「宋代」, 『史学』, 三田史学会, 第 85 卷 1-3 号第二分冊, pp.163-200, 2015 年。
2. 小二田章『咸淳臨安志』の編者潜説友 南宋末期臨安と士人たち, 『アジア遊学』, 勉誠出版, 180 号, pp.174-184, 2015 年。
3. 小二田章『大元一統志』「沿革」にみる編纂過程 平江路を中心に, 『宋代史から考える』, 汲古書院, pp.259-289, 2016 年。
4. 小二田章『《咸淳臨安志》の編者潜説友』, 『第三届中国南宋史国際学術研討論会論文集』, 杭州: 浙江大学出版社, 下冊, pp.537-545, 2017 年。
5. 小二田章「再論乾道、淳祐《臨安志》-- 為了理解南宋地方志編纂的轉型」, 『首屆中日青年學者宋遼夏金元史研討會論文集』, 上海: 中西書局, pp.200-217, 2018 年。
6. 小二田章「地方志編纂と水利」『西湖志』編纂にみる清朝初期水利政治初探, 『中国水利史研究』, 中国水利史研究会, 第 46 号, pp.19-36, 2018 年。
7. 吳雅婷著、小二田章訳「南宋中葉の知識ネットワーク 「譜録」類目の成立から」, 『宋代史研究会研究報告 第十集 伝統中国の形成』, 汲古書院, pp.235-266, 2015 年。
8. 小二田章「批評と紹介: Joseph R.Dennis, *Writing, Publishing, and Reading Local Gazetteers in Imperial China, 1100-1700*, Cambridge: MA, Harvard University Press, 2015」, 『東洋学報』, 公益財団法人東洋文庫, 第 98 卷 1 号, pp.98-91, 2016 年。
9. 小二田章「北京大学図書館蔵『(寶慶)昌國縣志』について」, 『史滴』, 早稲田大学東洋史懇話会, 第 38 号, pp.92-102, 2016 年。
10. 劉静貞著、小二田章訳「「缺憾」あるが故の「創格」 沈葆楨の鄭成功評価についての試論」, 『経済史研究』, 大阪経済大学経済史研究所, 第 20 号, pp.161-182, 2017 年。
11. 小二田章「杭州 湖光山色」, 『古写真・絵はがきで旅する東アジア 150 年』, 勉誠出版, pp.118-121, 2018 年。

{ 学会発表 }(計 10 件)

1. 小二田章「試論三種《臨安志》の編纂意図 従其編者和記載看南宋变化」, 中国宋史研究会第十六届年会、於百瑞運河大飯店(杭州) 中国、2014 年 8 月。
2. 小二田章「《咸淳臨安志》の編者潜説友」, 第三届中国南宋史国際学術研討論会、於星都賓館(杭州) 中国、2015 年 11 月。
3. 小二田章「宋元方志中“沿革”条目編纂初探一以蘇州爲中心」, 中国宋史研究会第十七届年会、於中山大学中大学人館(広州) 中国、2016 年 8 月。
4. 小二田章「再論乾道、淳祐《臨安志》-- 為了理解南宋地方志編纂的轉型」, 首屆中日青年學者宋遼夏金元史研討會、於復旦大学(上海) 中国、2016 年 9 月。
5. 小二田章「康熙雍正期杭州的“地方志”編纂一以清朝的文化統治政策爲中心」, 清朝政治發展變遷研究国際学術研討論会、於復旦大学(上海) 中国、2017 年 6 月。
6. KONITA Akira, “The Biographies of Women in Local Gazetteers: Focusing on Qing Dynasty Historian, Zhang Xuecheng”, THE TWENTY-SECOND ASIAN STUDIES CONFERENCE JAPAN (ASCJ2018), Selected Panel(Chair.:Tomoko Gomi), International Christian University, Jun.2018.
7. 小二田章「『萬曆杭州府志』編纂考 明代後期、地方志編纂の意義」, 明清史夏合宿 2015 研究報告、於筑波山江戸屋、2015 年 8 月。
8. 小二田章「「知杭州」蘇軾 いつから名地方官となったのか」, 第 194 回宋代史談話会、於大阪市立大学、2017 年 3 月。
9. 小二田章「『西湖志』編纂と水利 地方志編纂と清朝初期の水利政治」, 2017 年度中国水利史研究会大会、於大阪教育大学、2017 年 11 月。
10. 小二田章「杭州地方志の編纂と地図」, 学習院大学東洋文化研究所連続講座「東アジア書誌学への招待」第 41 回、於学習院大学東洋文化研究所、2016 年 12 月。

{ 図書 }(計 1 件)

1. 飯山知保・久保田和男・小林隆道・小二田章・高井康典行編、『宋代史から考える』, 汲古書院、総 488p、2016 年。

〔産業財産権〕  
出願状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：  
ローマ字氏名：  
所属研究機関名：  
部局名：  
職名：  
研究者番号（8桁）：

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名：  
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。